

「福祉と経済」に関する初歩的一考察

阿部幸泰

始めに

H Pの「書籍：『障害者の経済学』を読んで」を目にした若者のメル友から、要約すると次のような問いかけがあった。

- 【①「障害者問題に経済性は馴染まない」と今まで聞いていましたが、やはり福祉問題にも「経済」の視点が必要になるのですか。
- ②「経済」というと、直ぐに「需要と供給」とか「金銭の授受」ということが思い浮かんでしまいますが、障害者問題にこうした市場経済の論理が馴染むのでしょうか。
- ③重度な障害のあるお子さん（成人になっても）をお世話し続ける親の行為を、経済の視点からはどう考えられるのですか。】

自分もまだまだ経済の仕組みについてはよく分からないが、障害者自立支援法が4月から施行されたこともあり、この際と思い大胆に我流で思考に挑戦し、現時点では拙いのは当然だが、次のようにまずは初歩的一考察をレポートとして以下のように返送信した。

【①「福祉問題に経済の視点が必要になるのか」について

なぜ、過去には福祉に経済学の視点を導入し難くかったか。まずは、ここから考察する。

「福祉は、素晴らしい、正しいこと。福祉に携わる人は、偉い人、凄い人。」という先入観や風潮がある。

その要因として、福祉的なことに面と向かうと、自分が試される場所があるだけに、人は避けて通ろうとすることが考えられる。

例えば、バスで高齢者が乗ってくる。さて、席を譲るか、知らぬふりして寝るか。正に、自分の心を試される。

福祉的な事象に向き合うと、こう面倒で心理的負担を感じるだけに、できれば係わりた

くないと思ってしまう。

福祉に金を使つての施策は行政に任せ、自分としては心理的負担を感じたくないから避けて通り、また、障害者は施設の職員に任せ、係わる機会を極力少なくしてきたのが従来の福祉であり、福祉に市場経済的視点は導入し難かったのではないだろうか。

介護保険法、障害者自立支援法に見るように、行政の経済的問題から福祉に金をそうかけられなくなつてきて、利用者から一部負担の施策が取られるようになってきた。

一部負担にしる、金銭の授受を伴う契約ですから、正に経済の範疇に入る。

また、時代が進み、今の（更にこれからの）個人個人の価値観が多様な（生き方が多様な）時代は、「障害者」という一つの括りで社会システムとしても対応できなくなつてきた。

その現れが、施設解体とか、障害者自身も地域で生活することを望んでいる。

障害のある方とて、自分なりの生き方を望んで当然な世の中。

以上触れてきたが、こうしたことから、やはり「福祉問題にも経済の視点が必要になつてきた」と考えられる。

②「市場経済の論理が馴染むのでしょうか」について

市場の原理として、利益至上主義的な経済学と、今までは考えていたと思う。

①で触れたように、障害者が地域で生活するとは経済的には否応なく障害者も経済システムと関係するということ。

今までは「措置」という名の行政処分であるがために、行政が予算をつけて対応してきた。

それ故、過去には「福祉は施し」と云われていた。

これからは、一部の負担にしる障害者も契約という市場経済の「金銭の授受」を伴うから、「受（支援サービス）」を取捨選択でき、また不満があれば、「授」側（施設、事業所等）に注文をつけるのは当然のこと。

「受」側のニーズを的確に掴みメニューを増やしたり内容を充実して行く「授」側が生き残り、対応できない所は消えて行くしかない。これも市場経済の論理。

潰れないようにサービスを工夫し、障害者に利用して貰うということは、「授」側から

云えば、「利益至上」ということなる。

「需要と供給」から云って、事業所等も供給内容の工夫のヒントを得るためにも、まず障害者がどういった「需要」内容が必要かという、ニーズの発信が大事な気がする。

需要があるところに、供給が生じてくるのも、市場経済の論理。

以上触れてきたが、これからは、「受」、「授」の両方とも、市場経済の論理を正しく理解し、活用していかなければならない時代に入ったと考えられる。

③「重度な障害のあるお子さんをお世話し続ける親の行為を、経済の視点からはどう考えられるのか」について

経済学は、投資（消費）があり、その効果（報酬）を問題にする学問でもあるよう。

人は、報酬を得るがために、投資やリスクを負担する。

株に投資するのは、株が上がれば儲ける（報酬を得る）が、下がれば損をする（リスクを負う）。

親がはっきりした報酬が見えないのに、子どもの教育に熱心になり塾や習い事に通わせるのは、将来、子どもが出世したり、人間性豊かに育つようと、子どものへの投資。

子どもは親の期待に添わずに大人になるかもしれない。これはリスクを負うことになる。

こうした一般論からの子育ては、容易に経済的視点で説明できる。

だが、障害の重いお子さんの子育ては、ではどう説明できるのか。

確かに、障害児を育てる親にとって、従来の効果（報酬）期待しながら投資する経済学の考えからいえば、報酬は少ないであろうことは、容易に推測できる。

障害者は、大きくなるにつれ、体が大きくなるので世話も大変。正に、親、社会の負担・リスクが増える。

しかし、親は子育てを続けるし、社会はそうした障害者と家族を支援しなくてはならない。

では、人にとっての報酬とは何なのか。

お金を得ること？ 社会的地位を得ること？

それらを考えるヒントして、次のようなことが考えられる。

キリストにしても、釈迦にしても、あんなに苦行難行、非難を浴びる、時に命さえ捨てるリスクをしょって何を得たのか、何の報酬があったのか。

キリストの教えは、愛。

また、古代から、母親の愛は「無償の愛」として、もっとも崇高な愛と考えられるところから、母子像は古今東西を問わず、彫刻、絵画等で描かれている。

しかし、「愛には、所有したいという願いが伴っている。それ故、障害のある我が子を受愛するが故に、道連れという悲劇が生じるのでないか」、また、「愛には所有の願い（欲）が伴うから、欲が満たされないと苦悩、苦痛等の煩悩が生じる。」という人もいる。

それ故か、「仏教の教えは愛をそれほど価値あるものと認めていなくて、仏教の徳の実践項目は、愛ではなく慈悲（他者に利益や安楽を与え、他者を思いやる気持ち）。」という人もいる。

養老猛司のいう「教養とは、人の心が解る心」とも通じることであろう。

こうした「無償の愛」や「慈悲」ある行為を、「報償なし」と片づけられるかどうか。

キリストの教え（キリスト教）、釈迦の教え（仏教）が、今の時代もその教えが受け継がれ、伝えられ続けている。

つまり、人類というか、人間のあるべき姿、目指すべき姿がそこにあるからでないか。

言い換えれば、人類の「最高の、崇高な報償」といえる。

HP 掲載の本：「障害者の経済学」に、「経済学の分析対象は、単に金銭の授受関係だけをいうのではなく、人間が起こした行動のインセンティブ（動機付け）の部分」とか。

また、「経済学では、愛を明示的に扱うことはないが、利他主義（他人の喜びを自分の喜び、他人の苦しみを自分の苦しみとみなすことができる考え方）という言葉に置き換えることがある」とか。

ということは、「無償の行為」も、また、「崇高な報酬」を自らの中に得ようとするのはインセンティブそのものであるから、経済学として対象になり得るということである。

人間が生きて行く上での苦悩、辛苦から解放されるという、この崇高な報償を得るために、教徒や修行僧は修行するという、投資やリスクを負うということになると思う。

障害児を育てる親の言葉として「こうした子どもをもってこそ、人としての大事なこと

を気づかされた」をよく耳にする。つまり、人として充実した生を実感しているよう。

似たような親の心情の話として、エドナ・マシミラ作・大江祐子訳「天国の特別な子ども（注：参考文献：参照）」を目にして、この詩に救われ、癒され、生きる勇気を得たという親も少なからずいる。

これとて、障害のある我が子を育てるといふ、自らの生の意味を感じる事が出来たということだろう。

このように、世間一般によくいわれている「この世に金で買えないものがある」ということでもあり、対照的な言い方としては「心が貧しい」ということでもあろう。

これらを考え合わせると、障害者の子育てにも「崇高な報償がありそう」である。

今の世の中のシステムでは、「授受」関係は最も効率的な、互いに納得し易いメジャーとして「金銭の受け渡し」といふ、いわゆる経済活動だといわれているが、今まで触れてきたように、金銭の授受も、経済学上の「授受」の問題の一つの手段に過ぎないものといえそう。

こう考えると、今の世界の「利益至上主義が、本当に人類の平和、幸せに寄与するのか」といふ方の問いかけも、その云わんとする意味が理解できるような気がする。

単に物質の「授受」で金銭が移動することが、今の世界の「唯一の価値基準」といってしまふと、資源の持てる国だけが栄えるということになってしまう。

また、限られた資源を手に入れようと、争い（戦争）が起こる要因となる。現に国家間の紛争の多くはそう。

もっと突き止めて考えると、物質を売って得たお金に満ち溢れたからといって、それが個々の人間の「崇高な報酬」に成り得るかということ。

それ故、釈迦は王子の身分（物質的に恵まれた生活）を捨ててまで、苦行の旅に出たよう。

また、北欧は、福祉に多大の投資を行っているにも拘わらず、自殺率は低くはないと聞く。

釈迦が修行を通して人間としてのあり方を自らに問い続けたというのであれば、①で触れたように、人は福祉問題に向き合うことで「自らの心を試す」といふ検証からこそ、「崇

高な報酬」に繋がると考えられる。

こう考えると、この世に経済学的側面からもムダな存在などない、といえるのでないか。つまり、従来は経済というと直ぐに生産性があるかないかを議論しがちであったが、「生産性」の概念も変革して行く必要があるのではないだろうか。

あの虐殺を待つだけのアウシュビッツ強制収容所の過酷な惨状の中でも、「人生の意味は、他人が人生の意味を考える手伝いをする」とフランクルは「夜と霧」の中で触れているように、人間は存在することだけでも意味をもち得ると考えられ、ムダな存在などないということと相通じる。

「他人が人生の意味を考える手伝いをする」ということは、言い換えれば、生きる勇気を与えるということであろう。

人に「生きる勇気を与える」ということでは、多大の生産性があるということではないだろうか。

例えば、難病、障害のある方の話を TV や本で知り、「生きる勇気をもたらした」という感想をしばしば耳にする。

互いが存在し合うこと、存在を認め合うこと、向き合い、係わり合う中で自らに問いかけることでしか、「崇高な報酬」は得られないともいえそうである。

しかし、「人はパンのみに生きるに非ず」とはいえ、私たちは市場経済の中で生きているし、生きて行かねばならないことも、現実。

それでも、やはり「パンのみに生きるに非ず」を自らに問いつつ、この2つ側面を自身の中でどう融合させて行くかの思索はし続けなくてはならないようである。

一言で大胆に言えば、人生とは、経済学でいう、崇高な「報酬」を得るがための「投資」を負いながらの修行の連続ともいえそう。

以上触れてきたが、「重度な障害のあるお子さんをお世話し続ける親の行為を、それを支援する人々（社会）の行為」を、経済学の視点からも説明し得ると思う。

おわりに

①、②、③の中で触れた考察が、今の時点で私の持ち得た「経済と福祉」についての初歩的な一考察。

この考察を、より確かに、また、充実させるために、更なる質問を！

質問され、自らの思索のチャンスをいただき応えることは、正に、経済学でいう「授受」ということだと思う。】

参考文献

- ・中島隆信：障害者の経済学、東洋経済新聞社、2006.
- ・小塩隆士：教育を経済学で考える、日本評論社、2003.
- ・大江祐子：「天国の特別な子ども」との出会いは26年前、
<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/angle-3/Apr2004-5.html>、2006.4.28.